

糖尿病治療にたずさわる医療者に「糖尿病の心理的アプローチ」という言葉は広く知られている。しかし、どのようにして「心理的アプローチ」を行っていかについて十分理解している医療者は多くはないと考える。本書は「心理的アプローチをこれから行っていきたい」と思っている皆さんや、現在「心理的アプローチを実践している」皆さんにぜひ読んでいただきたい1冊である。

本書は、事例編と解説編の2部で構成されている点が特徴的である。事例編は医師、看護師、管理栄養士、理学療法士の先生がタイプの異なった7ケースに対して、ディスカッション形式で心理的アプローチの実際を詳しく語っている。解説編は、「心理的アプローチ」「食事療法」「運動療法」「経口薬治療」「インスリン療法」「血糖自己測定」「高齢者」のトラブルとなるポイントをわかりやすく解説している。

事例編から読んでも、解説編から読んでも心理的アプローチについてより深く理解することができる内容となっている。

事例編のディスカッションは、その場に参加しているような気持ちで一気読むことができた。ディスカッションは、一般臨床でよくある血糖コントロールが難しい7人のケースがテーマとなり、そのケースで用いられた心理的アプローチの方法がとてもわかりやすく記載されている。「仕事が忙しく、勧められると間食を断れない患者」「運動を行っても、下らない血糖に怒りを持っている患者」「インスリン自己注射を行わなければいけない痴呆老人患者」「自己表現が苦手な若い1型女性患者」「医療者の支援を受け入れない患者」「重度の合併症を持った患者」「乳がんの再発に不安を持ち糖尿病の治療に取り組めない患者」など、まさに私たちが診療の

場で困っているようなケースを取り上げている。

ディスカッションのなかで石井均先生のコメントは、心理的アプローチやエンパワーメントアプローチがどのようにかかわっているかを繰り返して解説しているので、とても参考になる。

事例編でのもうひとつの特徴は、重要な点をわかりやすくするため3つの方法でまとめていることである。第一に重要な発言が色文字で強調され、第二に Check Point として議論の要点がまとめられている。さらに第三として設けられた吹き出しコメントは、発言の内容についての簡単な解説であり、詳細を解説編へと導いてくれるため、内容に不明な点を残さず理解しながら読むことができる。

解説編では、前述した7つのポイントを解説している。これらのトラブルのポイントは糖尿病の診療にたずさわる医療スタッフならぜひ抑えておきたいと考える。糖尿病治療では患者を中心としたチーム医療が大切である。患者と医療者が十分に話しあうことも大切であるが、患者のことを医療チームで十分にディスカッションすることも大切である。その際にこの7つのトラブルのポイントをしっかりと抑えておくことは、よりよいエンパワーメントにつながるものと確信している。

最後に、番外編で八戸市立市民病院西病棟7階の看護師の皆さんの一私たちの辞書には「手こずる患者」ということはないんです！(笑)—という言葉は心に残った。

本書は、糖尿病の心理的アプローチが「私たちにもきつとできる」という自己効力感を高めてくれる1冊であるので、ぜひ読んでいただきたい本である。

(B5判 184頁 定価2,835円(本体2,700円+税5%))
2004年 医学書院 刊